

『思春期ポストモダン』

(斎藤環著、幻冬舎新書、2007年)読書メモ

家庭教育を考える中で、思春期というものは結構大きなウエイトを占めていると思われる。それは、近年ニュースをにぎわせている青少年やその家族の犯罪が多くの関心を集めているから。そしてこの本は現代の思春期の問題について取り上げているわけだが、しかし、この本の著者は、まず、序章で「若者は本当に病んでいるのか」と投げかける。私たちは若者を、対話不可能なエイリアン(自分とは別世界のもの)として取り扱い、「若者論」を語ることによってストレス発散をしているだけなのではないかと。そもそも、大昔(古代ギリシャの落書きにもあった?)から若者は、「このごろの若者は」と言われてきたのだから。

大人の対応に問題があるのでは？

ただ、むしろ私たち大人の対応に問題がある場合というのはいくつか見られる。例えば、最近の犯罪等の傾向からか、かつて、「うちの子に限って」と弁護するような親バカから、「うちの子もひよっとしたら・・・」というつぶやきへと、寛容性が急激に低くなってきていて、特に、学校で採用されつつあるという「ゼロ・トレランス」(不寛容、厳罰主義)は、それによって重大犯罪が予防できるかどうか疑問なのにもかかわらず、学校現場で際限なく拡大され、子どもたちを追い込む危険性がある。とか、

最近、「発達障害」というものが注目を集めているが、発達障害という自覚が、当事者を生きやすくするのならいいけれども、若者をエイリアン化する視点として使われるのであれば問題である。

思春期の問題や病理を状況や構造の問題としてとらえる

著者は、思春期の若者の問題や病理を生み出しているのは、個人の問題というよりは、主に状況であり構造であるという考え方を元に、話を進めています。

具体的には、「家庭内暴力」の場合、家庭内暴力を振るう子どもは、本人に会ってみると、人前ではまったく当たり前のように振る舞うのに、自分と家族との関係性の中でだけ、なぜか異常な振る舞いに及んでしまう。これは、純粋に外的な要因でも、内的な要因でもない。子どもが母親に暴力を振るっているような場合、母子関係が近すぎて密室化してしまっていることが原因のひとつであることが多く、母親がタイミングよく家出をすることによって、絶大な治療効果がある。

精神病というものも、程度の問題があり、人類史の諸段階において、人間のさまざまな気質がその時代によって、補完しあっているということもあるようです。例えば、狩猟採集民の社会では、微妙な兆しや変化に敏感な分裂病親和者が有利な気質であり、農耕社会では貯蔵、整頓、支配を重んずる強迫症親和者が活躍し、近代社会においては、秩序と建て直しの技術にすぐれたうつ病親和者が「主役」となった、というように。そして、現代は時代が移ろいやすいためか、再び分裂病親和者の時代なのかもしれないのだそうです。

「生きづらさ」の現代性と普遍性

現代の成熟社会においては、「生き延びること」が至上のテーマではなくなってしまったので、その成熟度に反比例して、個人は成熟するのが難しくなっています(というか、いま「成熟」になにほどの価値があるかと問われれば、ちょっと口ごらざるをえない)。思

春期というのは、「うつろいやすく不安定である」という点において、いつの時代も普遍的で、その時代を映し出す鏡でもあるという意味で、現代の問題を一番特徴的にあらわしているとも言えます。つまり、思春期の問題は、現代の私たちの問題でもあるのです。

日本における若者の問題の特徴は「非社会性」

「一見してそれとわかるような非行少年が減少し、外見的には普通の子が、突然、理由もなくキレて暴れだすという傾向が一般的になっている」というイメージがあるが、それよりも、犯罪における国際比較でみても、「日本の若者は世界一、人を殺さない」というほど反社会性は低い。むしろ、1970年代に若い世代の「三無主義（無感動、無関心、無気力）」がいわれて以来30年以上も、この「無気力」モードが続いている。

そして、最近の若者に張られるレッテルは、非社会性に関係のあるものばかり。

不登校 12万人

当初「登校拒否」と呼ばれていたが、すべての子どもがはっきりと拒否しているわけではないので、「不登校」という呼び名に。治療すべきか、無理にでも学校に戻すべきかといった基本的な問題についてさえ未解決であるが、ひきこもりやニートのきっかけになるという側面を持っている。

おたく 285万人

1980年代に登場。当初は、ネクラで社会性がなく、ペドファイル（小児性愛者）が多いというイメージだったが、現在では、欧米の若者にも広く受け入れられ、ソフトウェアを大量消費する層として景気の動向を左右し、あるいは日本が世界に誇りうる輸出文化の担い手として、ポジティブに評価。

フリーター 417万人

1980年代後半に登場。定義は「15～34歳の若者（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）及び働く意志のある無職の人」。当初は、若者の新しいライフスタイルのように肯定的にとらえられたが、現在はニートよりましという程度という位置付け。

パラサイト・シングル 1220万人（男651万人、女569万人）

定義は「学卒後もなお親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」（ちなみに韓国では「カンガルー族」、ドイツでは「ホテル・ママ」）

社会的ひきこもり 100万人（調査が難しいのではっきりした数字はない）

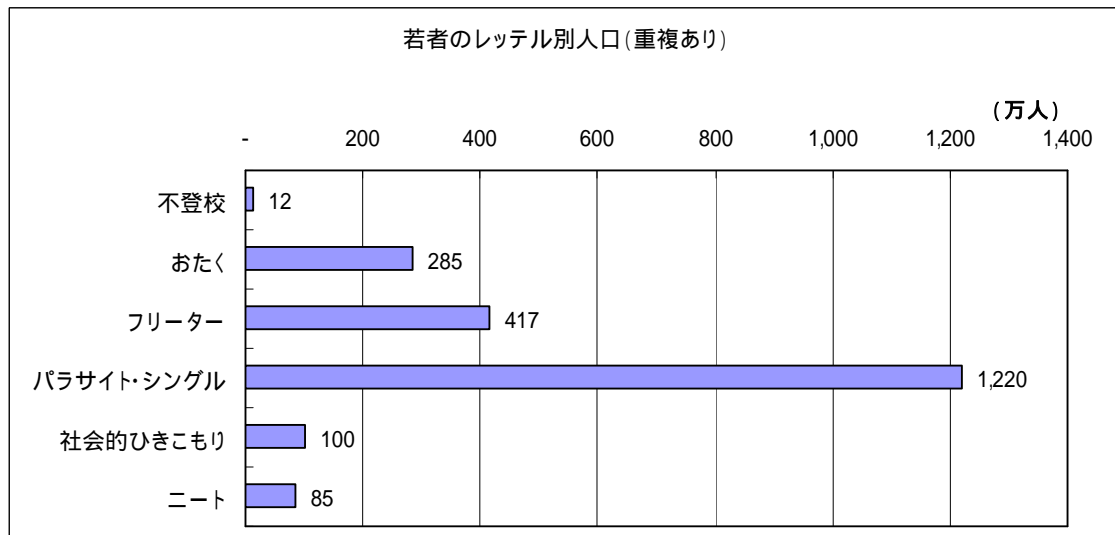
1990年代から急速に社会問題化したが、1970年代後半から徐々に増え始めた。定義は「6ヶ月以上社会参加がなく、精神障害を第一の原因としない」。

ニート 85万人

厚生労働省による定義「仕事をせず、失業者として求職活動もしていない非労働力のうち、15～34歳で卒業者かつ未婚で、通学や家事を行っていない者」。

その他、定義もはっきりしないが「ワーキング・プア」という言葉もある。一般には、「派遣・アルバイトなどの非正規雇用者で、正社員並に働いても生活保護支給額以下の収入しか得られない貧困層」を指すとされる。

ちなみに、上記の定義の中で、35歳という区切りが出てくるのは、実成人年齢が上がってきたということもあるが、厚生労働省的には、年金の受給資格には25年間の保険料納付が必要だからという側面がある。



もう一つの側面、強化されつつける母子密着関係

若者の変質をもたらした大きな要因の一つが「家族の変質」。とりわけ、わが国では「母親が過保護・過干渉で、父親が養育に無関心」という組み合わせが特徴的で、1960年代以降、「専業主婦」が急速に増えた。それは、近代の日本では、教育(=学歴)と出世が協力に結びつき、ほとんどの母親が、出世と縁のない夫(=父親)を恥ずかしく思いながら、わが子にだけは期待をかける「教育ママ」になったことに原因があるとされる。専業主婦として生産労働から離れた母の立場は不安定になり、夫に失望した母親たちが、わが子の存在だけを生きがいにするしかないという面もあったようだ。

現代若者のモード分類 「ひきこもり系」と「じぶん探し系」

思春期にあって大切な「コミュニケーション能力」と「自己イメージ」について考えるために著者が考えた分類で、モードなので固定的ではなく、同じ人でも入れ替わったり、部分的に混ざり合ったりもするもの。人間の「内面」というものが、他者とのコミュニケーションに葛藤することから生まれるものだからこういう傾向が生じると考えられる。つまり「その人と環境との関係」についての分類ということになる。

「ひきこもり系」は、非社会的モードで、他人と交わるより自分の世界を追求しているほうが好き。一般にコミュニケーションが苦手な積極的でないが、わりと安定した自己イメージを持っている。ガマンぶよいが、社会に居場所を失うと、本格的にひきこもりになってしまう。

一方「じぶん探し系」は、社交モードでコミュニケーションが巧みで友人が多く、行動的で活発。柔軟な適応力もあり、一見したところ何の問題もないが、親しい対人関係から離れると、自己イメージが不安定になりやすい。ガマンがきかないからキレやすく、対人関係で自分を支えている分だけ、社会適応に失敗するとリストカットしたり、カルトに走りやすい。

メディアの発達によって、この2つのモードの「コミュニケーション格差」が拡大され、コミュニケーション能力によって表面的な勝ち組、負け組が決まりやすい思春期において「じぶん探し系」が勝ち組になりやすい。しかし、コミュニケーションに多大なエネルギーと時間を費やすためか、学歴や職歴においては必ずしも勝者たりえない。そこで結局、思春期を勝ち残るのは、きわめて要領のよい「じぶん探し系」か、向上心を捨てなかった

「ひきこもり系」ということになる。

そして、「じぶん探し系」は（人間関係に対して開放的である）解放系メディアである携帯の利用率が高く、「ひきこもり系」は閉鎖系メディアであるインターネットの利用率が高い（携帯で話す相手は、一度は会ったことがあるかこれから会う可能性がある相手で、メールは会ったこともなく、会う可能性もない相手）。

解放系メディア（携帯電話、カラオケボックス、プリクラ）は、おおむね人間関係を補完したり円滑にしたりするという位置づけがあり、閉鎖系メディアは、現実の人間関係に直接影響を持ちにくい性質がある。

インターネットで使われるツールの若干の解説

・「チャット」・・・リアルタイムで文字のやりとりができる。話題そのものより、「いま、つながっている」という感覚のほうに価値がある。

・「電子掲示板（BBS）」・・・仮想空間に置かれた掲示板。現実の対人距離に当たるものが近くなりすぎるような印象もあり、密室の中で向き合っている相手とは、小さな権力争いがすぐに激しい争いに結びつきやすい。これとそっくり同じことがネット上でも起きているのかもしれない。

・「ブログ」・・・個人が運営するウェブサイトの一つの形式で、一番上に一番新しいテキストが表示され、古いテキストは順繰りに下がっていくというもの。現代の若者たちが持つ独特の孤独感や疎外感、あるいは誰かとつながりたいのだけれど、でも親密になりすぎるのはちょっと困るといった、矛盾した欲望がみてとれる。

・「SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）」・・・ネット上に仲間内だけの閉じたコミュニティを作るためのツールで、仲間限定だからかなりプライベートな情報も共有できる。日本最大手の「mixi」には、すでに一千万人近い参加者がある。

メディアの問題は、脳への影響より「嗜癖性」

人間は嗜癖する動物であり、ほとんどあらゆるものが、嗜癖の対象となる。「脳汚染」とか「ゲーム脳」は、典型的な疑似科学なので問題にはならないが、寝食を忘れて没頭する人がでてくるほど依存性が高いことが問題。

ネットは欲望をフィルタリングする

リアルな人間関係に支えられた携帯などの解放系メディアが、若者の中に著しいコミュニケーション格差をもたらしたという問題があると言う一方で、インターネット固有の問題には、「動機や意思の強化」がある。例えば、ブログには読者がいるので、書き手が読者の前で何かの宣言をすることで、自分自身をちょっとだけ、実行に向けて追い込むことができる。さらに、ネットは個人を匿名化し、その欲望だけを純粹に抽出するという機能があるので、マイナス面の欲望も前に進めてしまう可能性がある。ネットワークの仮想性が問題なのではなく、ネットワークがインフラを提供する「匿名の出会い」の問題が大きい。

「匿名性」と「欲望」のカップリングは、もしそれに終始すると、きわめて危険で、ネットを通じて欲望が実現しそうになったら、早い段階で匿名性は解除されないといけない。匿名の欲望は、個人を越えて暴走してしまう可能性があるから（だから、ネットのコミュニケーションが本当に有効なのは、すでに生身で出会っている者どうしが、親密な関係を保つために使う場合に限られる）。